

先月号に引き続き、2年前に人権の主張で発表された南国市の小学生の作品を紹介します（原文のまま）。

識字学級を勉強して

後免野田小学校5年 高見 沙希

先日、私たちは、南国市の識字学級生と、交流学習会をしました。

最初に、おじいさんたち、おばあさんたちといっしょに、「人の世に熟あれ、人間に光あれ」という文章を書きました。初めは、少しきんちようしていたけれど、だんだん親しく話ができしました。

「おばあちゃん、この言葉はどの本からとったの」と聞くこと、「水平社宣言の一番あとの言葉だよ。私たちの大事な大事な願いです。あんたらあも、いつかは、この言葉の勉強をしてね」と話してくれました。おじいちゃんやおばあちゃんからは、北代さんの字から考えると、思った以上に上手だったので、びっくりしました。何回も何回も努力して、練習を積んだのだなあと感心しました。

次は、いよいよ「聞き取り」の学習でした。各グループごとに、前もって課題を決め、

質問を考えていました。私たちのグループは、「識字学級に行くようになったきっかけ」と「字を覚えてからの喜び」について、質問しました。

聞き取りの中で、私の胸をジーンと打った話は次のことでした。

「字が読めないときは、新聞は読むものではなく、物をつつむもの」「子どもに、この字はなに、と聞かれた時、読めなくてくやしかった、はずかしかった」「選挙の時、投票所で自分の思う人の名前を自分で書けた時、それはそれはうれしかった」などのことを聞いてみると、文字を知らないうちから生活が閉じこめられるような気がしました。識字学級の人たちは、だれもが仲間といっしょに学習できることを、心から喜び合っていました。

北代さんが書いた手紙にあった、「10年ながいきしたい

と思います」といった生きる喜びと、南国市の識字学級の人たちの喜びも、まったく同じ喜びだなあと思いました。識字学級の交流会が終わった後学校で各グループごとに聞き取ったことをもとに「かべ新聞」をつくって、発表会をしました。

私たちのグループは、かべ新聞の他に、西部保育所から借りてきた「てがみ」という紙しばいも発表しました。この紙しばいは、「なぜ、文字が習えなかったのか」「どうして識字学級ができたのか」「識字学級へ行くようになったきっかけ」「文字を覚えてからの喜び」などの話が絶まどめになっている内容です。

発表の日まで、みんなで分担して、何回も何回も練習しました。

私は、「識字学級の勉強をして」、おじいさんやおばあさんたちが、文字を覚えるだけではなしに、心が明るく、豊かになってきたこと、文字をしらなかつた時、自分の生活が暗いせまい所に閉じこめられていたようであったものが、文字を覚えだしてから、明るい広い所に出たような感じがしました。

また、「部落差別をなくする取り組み」を仲間といっしょに大切にしていること、みんな支え合いはげましながら、今、識字学級で勉強していることに、生きがいを感じていることを知って、感動しました。自分のことだけでなく、みんなが幸せに生きるために、どうしたら良いのか、勉強していたのです。

今、私は、家のくらしについて、なんの心配もなしに学校で勉強できる毎日です。つい「もう勉強はえい」とグチをこぼすことがあります。これからの自分の幸せをつかむためにもがんばりたいと思います。

人はだれでもしあわせに生きたいものです。この人の幸せを、きずついたり、おかししたり、うばったりする差別を、身のまわりから一つひとつ取り除かなければ、みんなが幸せにはなれません。

「だれにも差別はさせません」「だれにも差別はしません」「だれにも差別は許しません」今、自分自身の心に問いなから、毎日の生活の中で、人を大切にす言動を、一つ、また一つと増やしていこうと考えています。